〝運転は ゆったりハートに しっかりベルト〟

実際の交通事故や実験の結果からみて、運転席と助手席で同じようにシートベルトをしているのにもかかわらず、受ける衝撃やけがの程度が違う場合があります。これは、車内形状の違いもありますが、シートベルトを正しく着用しているか、していないかの違いもあります。せっかくシートベルトを着用していても、窮屈だとか面倒だという理由で誤った使い方をしていると死を招く結果になります。

ベルトのたるみが命取り

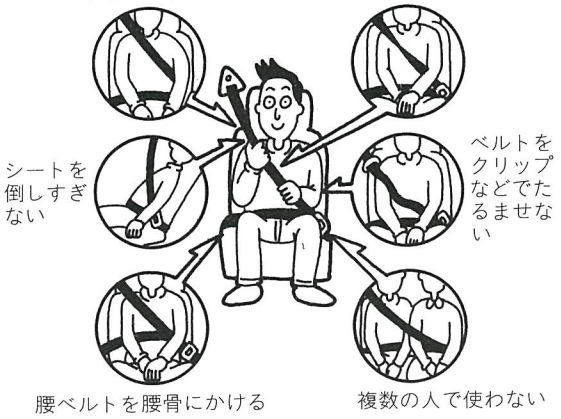
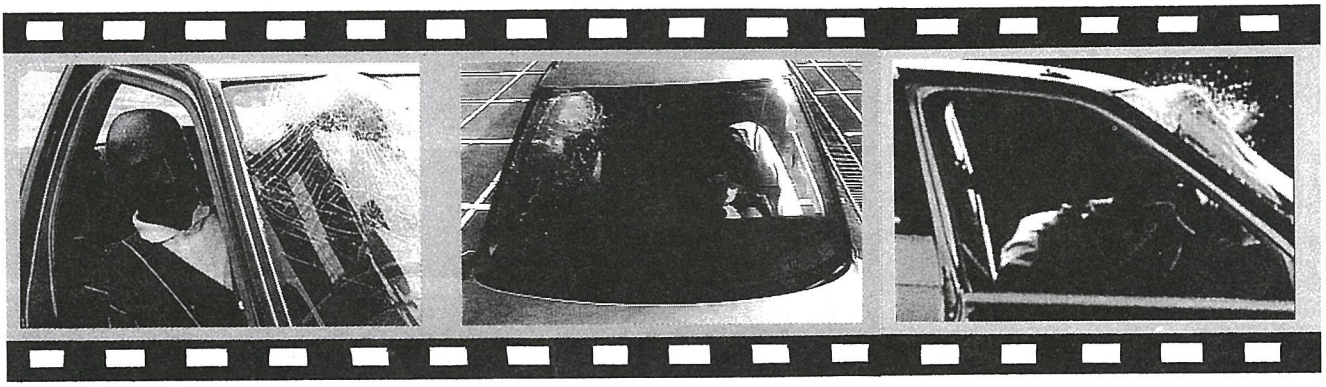
このケースでは、たるみ分だけ体が前に動いてからベルトがロックされるため、衝撃により胸骨やろっ骨の骨折、肺の損傷など、致命的なけがをもたらす場合があります。

車が衝突したとたんに体は前方に潜り込み、ひざは前方の構造物にぶつかり、おなかはベルトで圧迫される恐れがあります。特に、ひざには体の荷重がかかり、大たい部骨折の危険もあります。

交通事故の衝撃から体を守るためには、シートベルトを正しく着用することが一番です。シートベルトは取り付け金具やベルト本体など、全体に約3トンの重さがかかっても耐えられるように設計されています。これは、小型の乗用車が3台ぶらさがってももちこたえることができる強度です。しかし、正しくシートベルトを装着していなければ、その効果は発揮されません。

0・02秒の衝撃から、体を守ってくれるシートベルト正しく着用することが、交通安全の第一条件です。

正しい着用は命を守る



バックルはカチッと音がするまで